登場人物

リコリス　(夏水仙)

篠崎修二・しのざきしゅうじ……喫茶店リコリスのオーナー(マスター)
當間篤志・とうまあつし………リコリスの常連客、一浪している予備校生
川村元子・かわむらもとこ………リコリスの常連客、酒屋の一人娘　(あだなゲンちゃん)
神尾昇・かみおのぼる…………事故現場に佇む男
高畑稔・たかはたみのる………ひき逃げ事故の被害者の息子
高畑愛海・たかはたまなみ………稔の妹
八田常雄・はったつねお………近所の老人
八田靖子・はったやすこ………常雄の妻
平山孝一・ひらやまこういち……近所の交番勤務の巡査
溝口啓太・みぞぐちけいた………元暴走族
野元卓也・のもとたくや………元暴走族
笹井裕樹・ささいひろき………リコリスの常連客、寺の住職の息子
平静江・たいらしずえ…………リコリスで英会話を習っている近所の主婦
柴山美津子・しばやまみつこ……リコリスで英会話を習っている近所の主婦
深田早苗・ふかださなえ………近所の主婦　町内の子供会役員
猪俣晋・いのまたすすむ………主婦達の英会話教師
男………………………………ひき逃げの犯人

舞台奥が店内で、舞台ツラ(手前客席側)が表の通りという設定。舞台奥の上手にカウンター、下手に小さなテーブル席が二席。それぞれのテーブルに椅子が二脚ずつ。上手の出はけ口は、舞台奥カウンターの右に一箇所、これは店の奥の部屋につながる入り口と、表通りの上手出はけ口として共用。下手は奥に店の入り口(袖幕のみでドアなどは見えない)と、手前に表通りの下手出はけ口。出はけ口は以上三箇所。

喫茶店リコリスの店内。前の客の残した食器を片付けたり、テーブルを拭いたりしている修二。カウンターの端の席に座ってコーヒーを飲んでいる元子。そんな情景の中に修二の心の声が聞こえてくる。

修二(声)　あれから三年…初めは、時の流れが、僕の記憶から君の姿を消してしまうのが怖かったけど、今はそうじゃないって、はっきり言える。君と一緒に始めたこのリコリスのおかげで、僕は今も、毎日君を身近に感じながら生きている。

鈴の音(玄関のドアについている)がして、中年の客(神尾)下手奥より登場。

修二　いらっしゃいませ。お一人様ですか。(頷く神尾昇。席に促し、注文を聞いて、コーヒーを作るためにカウンターに入る修二のシルエット)

修二(声)　君が好きだったマックナイトの絵、一緒に選んだコーヒーカップ、すべてが思い出の入り口だけど、それだけじゃないんだ。僕はこの店の中にいれば、もっと確かに君の存在を感じることが出来る。

例えば昨日、君はゲンちゃんの話を本当に楽しそうに聞いてたよね。例のお見合いの席での武勇伝だよ。彼女のきつい冗談に笑い転げてた。そう、コーヒーを入れながら元ちゃんと話していた僕のすぐ隣で。
(神尾にコーヒーを出して、再びカウンターに戻る修二)
そして今朝は、僕がトースト用のパンをスライスしようとしてナイフを床に落としたとき、君はびっくりして大声をあげたよね。それから心配そうに僕の足元を覗き込んで「パンを切るのはまだ早いわ、お客さんに出す前に切り口が乾燥しちゃうじゃない」って言ったよね…。お客もちろん、こんな話は誰にもしない。頭がおかしくなったと思われても困るからね…。でも、僕はこの店で、今も君との新しい思い出を作り続けているし、多分、これからもずっとそうだと思う。

店内、明るくなる。

元子　だから、野球観に来るお客を当て込んでここに決めたんでしょ。

修二　まあ、それもあるかな。

元子　それ以外に無いじゃない。で見事に当てが外れたって訳だ。

修二　う～ん、現状がこうだからあながち否定は出来ないけど。

元子　だからマスターはビジネスセンスが無さ過ぎだっつの。

修二　まあ、その意見もあえて否定はしません。

元子　否定できないでしょ。駅の改札出たらすぐに球場の入り口っていうのが西武ドームの売りなんだから。野球観に来たお客が流れて来る筈無いって、どうして分かんなかったかな。

修二　でもほら、電車だけじゃなくて、マイカーのお客さんもいるし。

元子　それも甘い。車のお客は、何も球場に近い店に入らなくても自宅と球場の間にある一番ステキな店を選ぶんだから。

修二　ステキじゃないかなウチは。

元子　だから問題はそこじゃ無いのマスター。マスターが商売に向いてるかどうかって話。

修二　まあ、胸張って向いてますとも言えないけど。

元子　まったく。例えばね、この店は確かに大通りに面してるけど、店の前の急カーブ、案外車入れにくいでしょ、そこまで考えた？

修二　ああ、それね、店始めてから分かった。たまに車で来た日には実感す

る。

元子　これだもん。

修二　でも本当はね、場所より大事なのはサービスのクオリティーだと思ったのね。ほら、行列の出来るラーメン屋って場所は関係ないらしいよ。だから、ウチもコーヒーの味で勝負だって。

元子　あのねマスター、ラーメンとコーヒー一緒にしちゃダメよ。

修二　どうして？

元子　ラーメンって味の良し悪しが分かり易いのよ。コーヒーの味が本当に分かる人なんてそんなにいないんだから。

修二　え〜、元ちゃんそんな事言うかな。

元子　だって行列の出来る旨いコーヒーショップなんて聞いた事ないもん。コーヒーにうるさい人達って微妙な違いにこだわってるのよ。

修二　その微妙な違いが大切で、

元子　オーディオファンがデジタルの音はダメだ、真空管で出す音は温かみ

があって良かったとかって言ってるのと同じなの。興味ない人には違いが殆ど分からない。

修二　何だか僕の存在そのものを否定されたような気がするな。

元子　車のお客とか言いながら、どうせ交通量の調査とかもしないでここに決めたんでしょ。

修二　まあ、そこまではやってないね。

元子　あ～、何か不毛な会話に思えて来た。

修二　ついに見捨てられちゃった？

元子　マスター、もっと危機感もってよ。

修二　はいはい。

元子　はいはいって、この店なくなったら私や篤志は何処に行けばいいのよ。

修二　篤志君は大学受かったら一人暮らし始めるって言ってたから都内に住むんじゃない。元ちゃんだってそのうちお嫁に行っちゃうでしょ。

元子　マスター、私は生きてる限りここに通い続ける女よ。だって私や篤志

修二　みたいなご近所さんだけでもってるんだもん、この店。
元子　ありがとうございます。
修二　それに私、当分結婚なんてしないし。
元子　どうして？川村酒店の一人娘として跡取りの婿養子を募集中じゃなかったっけ。
修二　それは親の希望。
元子　そうなんだ。
修二　何より私につり合う程のいい男なんて、そうそういないじゃない。多分、日本中探せば三人くらいはいると思うんだけど。
元子　(納得)なるほど。
修二　マスター、そこ突っ込むとこだから。
元子　あ、そうなんだ。(二人で笑う)
ドアについている鈴の音、下手より、篤志登場。

修二　いらっしゃい。

篤志　こんにちはマスター。

元子　篤志今日は遅いじゃない。

篤志　うん電車止まってて、振り替え輸送とかで大回りして来たんだよ。

修二　え、電車止まってるの？

元子　何で？

篤志　雨です、大雨。

元子　え、雨降ってる？

篤志　局地的な集中豪雨、大泉学園あたりで線路が冠水だって。

修二　そっか、ゲリラ豪雨とかっていう奴だね。

元子　こっちは降ってないのにね。

篤志　こっちもぽつぽつ落ちてきてるよ。

元子　そうなの。

篤志　途中タクシーも使って帰ってきたんだから、もう最悪。

修二　うわ～辛いね、じゃあ今日はサービスしちゃうか、何にする。

篤志　マスターありがとう、じゃあアイスココア。

元子　マスター、ちゃんとお金取らなきゃダメ、甘いって。

修二　ココアだけに。

篤志　面白い。

元子　全然面白くないし。

篤志　どうしたの元ちゃん。

元子　ガキンチョが気安く元ちゃんなんて言わないの。

篤志　はいはい、元子さん。どうなさったんですか。

元子　篤志、私はちょうど今、この店の危機的経営状況についてマスターと話していたところなの。

篤志　危機的ってこの店が？

元子　そうよ。マスターがあんたみたいなちっとも売り上げに貢献しないお客を大事にするからこのリコリスは潰れそうなの。

篤志　そうなのマスター？

修二　(奥の客を実にして)元ちゃん、あんまり大きな声で、

篤志　そんなのやだよ。ここなくなったら俺どこに行けばいいの。

元子　いつもタダで飲み食いしてるあんたが、何勝手なこと言ってんのよ。

篤志　だって俺そんな事知らなかったんだもん。

元子　毎日来てて普通気付くでしょ、いつもお客なんてろくに入ってないんだから。

修二　だから、元ちゃん、

篤志　そう言えばそうだよね。

元子　あんたもマスターと同じね。

篤志　俺のどこがマスターと同じなの。

元子　人がいいばっかりで肝心なことが全然見えてなくて、何より生活力の無さが男としてもう致命的。

修二　手厳しいな。

篤志　元ちゃん、マスターはそうかも知れないけど俺そんな事ないよ。

修二　あれ、何だよ篤志君まで。

篤志　だって俺、仕事はばっちりだもん。バイト先でもしっかりしてるってすごい褒められて、ああそうそう、今度俺主任になるんだよ。

修二　へ～すごいね。

篤志　すごいっしょ。

元子　それで、時給は上がるの？

篤志　いや金の問題じゃないんだよ、すごい頼りにされちゃって、新人の教育とか任されて、何てったって主任だもん。

元子　篤志、もしかして時給全然上がらないの。

篤志　だから今不況だし、うちの会社も苦しいんだよ。それに俺は金にはこだわってないし。

元子　馬鹿、それ名ばかり店長とか名ばかり主任って言う奴よ。

篤志　え、

元子　責任重くなってやることきつくなって時給は同じ。て事は実質的な減俸なの。会社に上手く利用されてるのに、そんな事も気付かないなんて。

篤志　そうなの?(マスターを見る)

修二　そうかもね。

元子　話になんない。仕事はお金を稼ぐためにやるのよ。あんた今日タクシー代いくら使ったの。

篤志　四千円くらい。

修二　うわ~、かわいそうに。

元子　マスター同情しなくていいの。篤志、

篤志　はい、

元子　あんたバイトから帰るのにそんなお金使ったら、今日何のためにバイトに行ったの。

篤志　だって、電車が動かないんだもん。

元子　電車なんて待ってたら動き出すの。それにたとえ歩いて帰ることになってもあたしだったら意地でもタクシーには乗らない。それじゃああんた、今日一日タクシーに乗る為に働いたようなものじゃない。

篤志　だって、

修二　元ちゃん、もうそのくらいで。

鈴の音、下手奥より、あわてた様子で裕樹が飛び込んでくる。

裕樹　マスター、

修二　裕樹君、

裕樹　ひき逃げ、

元子　え、
篤志　ひき逃げ？
裕樹　だと思う、女の人が倒れてて、
修二　どこ、
裕樹　横断歩道のところに、端に寄せないと、結構道の真ん中辺りで、
元子　そのままにして来たの？
裕樹　だって、
元子　マスター、
修二　元ちゃん、救急車連絡して、それから警察も、
元子　分かった。
下手奥へ飛び出していく修二、篤志、裕樹。
元子　(携帯で)もしもし、あの車にはねられた人がいるみたいで、はい？あ、

いえ、いるみたいっていうのは、つまり、近所の人が、この店のすぐ近くで車にはねられた女性がいるって、それで(神尾が突然立ち上がり、修二達の後を追って飛び出して行く。元子は客を目で追いながら電話を続ける)…あ、店は西武ドームの近くのコーヒーショップで、リコリスって言います…。

― 暗転 ―

闇の中の豪雨。走る修二、篤志、裕樹。

修二(声)　飛び出した店の外は、その夏一番の激しい雨が降っていた。闇の中を走る僕達の目に、痛いほど大きな雨粒が飛び込んできた。

裕樹　(言いながら下手前らか飛び出す)マスター、こっち、こっちだよ。

上手前に、倒れた女性のシルエット、女性の頭を起こそうとする篤志。

修二　頭を揺らさないように、

篤志　(裕樹に)そっち、足、足持って、

裕樹　だって、だって俺、

篤志　何やってんだよ、

修二　　裕樹君、大丈夫、大丈夫だよ。(篤志に)二人で、そっと抱えよう。

篤志　　うん、

下手前より飛び込んできた神尾、三人を押しのけて女性を抱き起こす。

修二　　知ってる人なんですか。

神尾　　う、う、(嗚咽、そして号泣)ぅわ~。　　― 暗転 ―

闇の中、遠くから救急車のサイレンが近づき、やがて遠のいていく。
カウンターの上に置いた花、一輪挿しのリコリスが浮かび上がる。

声(SE)　　これだよこれ、やっぱネットって便利だよね。綺麗なピンク色だし間違いない。えっと…リコリスか、名前も可愛い。和名は夏水仙だって。花言葉はね、「深い思いやり」「あなたのためなら何でもします」いいじゃない。ねえ、そんなお店にしようよ。響きもいいよ、リ・コ・リ・ス。あっ、花言葉もう一つあった…こっちはやだな「悲しい思い出」だって…。

店内明るくなり、数日後、朝、リコリスの店内。被害者の息子と娘である稔と愛海が礼を言うために訪れている。上手に携帯で話している元子。

元子　(携帯で)そうそう、ご家族の方…とにかくマスターに会いたいって、だからすぐに戻って、うん、うん、

稔　(元子に)あの、すみません。

元子　あ、マスターちょっと待って、(携帯を耳から離す)

稔　あの、ご迷惑はおかけしたくないので、また出直します。

元子　あ~いいんですいいんです。もう全然問題なし、本当すぐ近所のパン屋さんに行ってるだけですから。

稔　すみません。

元子　もしもし、ううん何でもない、とにかく早く帰ってきて。お願いします。(電話を切り、稔に) すぐに戻りますから。

稔　申し訳ないです。お礼を言いに来て、かえってご迷惑をおかけしてるみたいで。

元子　ちょうど良かったんです。そろそろ帰って来てもらわないと困るのに、マスター、パン屋で掴まってるんです。お店で出すトースト用のパン

を毎朝買いに行くんですけど、もうそのパン屋の奥さんがすごいマシンガントークで、話し始めるとなかなか帰してもらえないんです。

稔　そうなんですか。

元子　そうなんですよ。それにここのマスター、ぼおっとしてて頼りなくて、何やっても空気読めない人なんですけど、それが近所のおばさん連中の枯れそうになった母性本能をくすぐるみたいで、変に人気があるんですよ。だから、(稔の様子を見て)ああ、ごめんなさい、こんなくだらない話、聞きたくないですよね。

稔　あ、いえ。

元子　大変な時にいらしてるのに、何言ってるんだろ、あたし…すみません。

稔　あの、このお店の方なんですか。

元子　私、ですか。私近所の酒屋です。

稔　酒屋さん。

元子　ええ。配達でいつもこの辺りをぐるぐる回るんです。それで、一日二、三回はこの店に立ち寄るって感じで。

稔　　なるほど。

元子　そんなにコーヒー好きって訳でもないんですけど。あっ…あの夜も、
　　　仕事帰りにここでコーヒー飲んでて…。

稔　　じゃあ、ご一緒だったんですね。

元子　ええ、マスターに言われて救急車呼んだのは私です。

稔　　そうだったんですか。ありがとうございました。(愛海を見る)

愛海　ありがとうございました。

元子　あいえ。それで…お母様は、

鈴の音。ドアが開き、パンの包みを持ってマスター登場。

修二　どうも、申し訳ありません。お待たせしました。

元子　マスターです。

稔　　篠崎さん、ですか。

修二　はい。

稔　先日はお世話になりました。事故にあった高畑真紗子の息子です。警察でこちらの事を伺ったので、お礼をと思ってお邪魔しました。

修二　そうですか、わざわざどうも。

稔　ありがとうございました。

愛海　ありがとうございました。

稔　妹です。

修二　どうも。あの、良かったら(席を勧め)お掛けください。

稔　いえ、お世話になったお礼を、一言だけ言いたくて伺ったので、すぐに…。

修二　そうですか…それで、お母様はあの後…。

稔　ずっと昏睡状態が続いていたんですが、結局…意識が戻る事はなくて…先週の、木曜に…。

修二　…そうですか。

稔　でも、本当に、お世話になりました、ありがとうございます。

愛海　…(頭を下げる)

修二　私たちは警察と救急に連絡しただけなんですが…結局、何のお役にも立てなくて…。

稔　いえ、通報が遅れていたら、後続の車にも轢かれてたかもしれないって警察で言われました。路肩に寄せて頂いたおかげで、それだけは免れた訳ですから…ありがとうございました。

愛海　ありがとうございます。

修二　第一発見者は私たちじゃないんですよ。近所の延暦寺っていうお寺の息子さんで、うちの常連さんなんですが、その日もここに来る途中で、裕樹君っていうんです。

稔　はい、その方の事も警察で聞きました。ここに伺う前に、お寺の方にも行ったんですが、息子さんはお留守で。

修二　そうでしたか。

稔　　伝言という形で失礼だったのですが、お礼だけ伝えさせて頂きました。

元子　あの、はねた車はまだ、

稔　　ええ、まだ。

修二　そうなんですか。

稔　　手がかりになるような物も、何も無いらしくて…。

修二　一応、私たちも警察に聞かれて、駆けつけた時の状況だけは伝えたんですが…。

元子　誰か見てた人とかいないのかな。

稔　　警察が探してくれてはいるんですが、今のところは…。

一同　…。

修二　それで、お父様は、

稔　　え、

修二　いいえ、お父様も随分お力を落としていらっしゃるんじゃないかと思い

稔　ました。

修二　うちは、母と私たち兄妹の三人家族です。父は随分前に他界していま
す。

稔　…そうですか、失礼しました。

修二　いいえ。

稔　あの時、年配の男性が、お母さんに駆け寄られて…私は、てっきりご
主人かと思ったものですから。

修二　年配の、男性…。

元子　ええ、その方が救急車にも乗り込まれて、ですから、多分病院まで、

稔　その人、ここでコーヒーを飲んでらしたお客さんです。マスターたち
を追いかけるみたいにここを出てったんです。

修二　そうですか…そんな話は…。

稔　病院でも何も言っていませんでしたか。

ええ、うちに連絡が来たのも、母の所持品で身元が分かったようで。

修二　そうですか。

元子　(修二に)何だか、変な話ね。

稔　あ、でもきっと、こちらの皆さんみたいな、通りがかりの親切な方ですね。今となっては、お礼を言う事も出来ませんが…そうだ、愛海、

愛海　うん。(持っていた紙袋を稔に渡す)

稔　(紙袋を修二に差し出す)これ、お世話になったお礼です、本当に気持ちだけなんですが。

修二　いえ、そんな事は、

稔　こういう時ってどうするのか分からなくて、冠婚葬祭の手引きとか見たんですが、参考になるような項目も無くて。

修二　そうですよね。

稔　本当に、お礼の気持ちだけです。

修二　じゃあ、(紙袋を受け取り)ありがとうございます。

稔　では、これで、失礼致します。

修二　そうですか、どうかお気を落とさずに。

稔　ありがとうございます。

元子　どうも。

修二　どうも。

稔、愛海、退場する、二人を見守る修二と元子。ドアの鈴の音

元子　轢き逃げか～。ひどいよね、人をはねといてそのまま逃げるなんて。

修二　そうだね。

元子　でも何か、すごい礼儀正しい人だったね、あのお兄さん。

修二　うん…こんな時に、(土産を)ちょっと気配り出来過ぎな気もするけど。

元子　そう言えばそうよね。それに妹さん何も話さないし、正直、ちょっと息が詰まっちゃいそうだった。だって、こんな時ってどんな言葉をかけたらいいのか分かんないんだもん。

修二　…そうだね。

元子　あれ、マスター何か考えてる。

修二　ん、いや…元ちゃん、コーヒーでも淹れようか。

元子　そうしたいけど、午前中に配達頼まれてるところあるから、そろそろ行かなきゃ。

修二　じゃあ、うちも店開けようかな。

元子　あのさ、近頃この店どんどん開店時間が曖昧になってない。

修二　少し幅があるだけだよ、せいぜい三十分以内の。

元子　マスター、商売の基本はね、

修二　ありがとう元ちゃん、配達いいの。

元子　マスター、

修二　大丈夫。うちのお客さんの殆どが準備中の札なんか構わず入って来るご近所さんだから。

元子　それも問題なんだから、

鈴が鳴り、下手奥より近所のおばちゃん二人組が登場。

美津子　マスター、おはよう。

静江　おはようさん。

修二　おはようございます。(元子に)ねっ。

美津子　あら、元子さん今日もいたの。

元子　(無愛想気味に)おはようございます。

静江　元子ちゃんも英会話やってけば。

元子　遠慮しときます。

静江　馬鹿ね、社交辞令よ。

元子　何ですかそれ。

美津子　静江さん、席ここでいい？(上手のテーブルに向かう)

静江　いいんじゃない。

元子　あの、表の札、準備中になってませんでした。

静江　え、この店そんな札あったっけ。

美津子　元子さん、あんたここで何やってんのよ。

元子　私は、ちょっとお手伝いです。

美津子　ふ～ん。

静江　マスター、英会話にはちょっと早いけど、いいわよね。

修二　はい勿論。先生の方はいつものお時間ですか。

静江　ああ、多分今日もいつも通りよ。

修二　そうですか。

元子　マスター私行くね。

修二　元ちゃん、運転気をつけて。

元子　マスターも（おばちゃん達を）気をつけて。（下手に退場）

美津子　ブレンド二つでいい？

静江　あたし今日はアメリカンで。

美津子　マスター、ブレンドとアメリカンお願い。

修二　かしこまりました。（カウンターに戻る）

美津子　静江さんがアメリカンって、珍しいね。

静江　胃の調子が、

美津子　食べすぎ。

静江　ストレスよ。

美津子　何、また旦那とケンカ。

静江　私悟った、あの生き物とは意思の疎通が出来ない。

美津子　男と女なんて元々そんなもんよ。

静江　離婚しない限りこのストレスから開放される事はないわ。

美津子　んな根性も無いくせに。

静江　価値観が全く違ってるから会話が成り立たないのよ。

美津子　成り立たなくてもあるだけマシじゃない。ウチなんて会話自体存在しないもん。

静江　日本の男はダメよ。

美津子　それは確かね。やっぱり英語頑張ってイギリス人かアメリカ人の彼氏作るしかないわね。

静江　私はどっちかっていうオーストラリア人の方がいいわ、開放的な感じしない。

美津子　オーストラリアもいいわね。

静江　とにかくイケメンのマイクやロビンと燃えるような恋がしたいわ。

美津子　だったらスティーブは、

静江　ああ、それはちょっと、

猪俣　（猪俣、下手より登場）ハーイ、ハロー。

修二　いらっしゃいませ。

猪俣　ノーノー、イングリッシュオンリー、マスター。

修二　失礼しました。ウエルカム、ミスター猪俣、今日はお早いですね。

猪俣　あの、マスター、猪俣もちょっと。

修二　え、

猪俣　先週、英語名を決めましたので、

修二　英語名？

主婦たち　ハ～イ、スティーブ

猪俣　ハ～イ、キャサリン。ハーイ、エリザベス。（呼ばれてそれぞれにポーズとる主婦たち）

修二　なるほど。

―　明転　―

車の行きかう音。照明変わり、初夏の昼下がり、店の前の通り。上手から下手、下手から上手へと行きかう歩行者、学生、サラリーマン、若い女性、主婦。歩道を歩く初老の夫婦、常雄と靖子が立ち止り、街路樹を見上げて話し始める。常雄は杖をついている

靖子　マルチョウの前の通り、ハナミズキになりましたけど、やっぱりこの辺りの街路樹はケヤキですね。

常雄　近頃は風情を解さない人間が増えたから、ケヤキは落ち葉の量が半端じゃないって苦情が多いんだよ。

靖子　大きくなる木ですからね、でも私はケヤキが好きですよ。

常雄　ああ、天を衝くような高い幹、まっすぐな黒い枝に映える春先の新緑、ケヤキは武蔵野の街並みに一番似合う木だ。

靖子　秋の落ち葉も、葉の落ちた冬の枝も、みんな奇麗じゃありませんか。

常雄　そう、何を愛でるかだよ。草木は人間の都合に合わせちゃくれないからね。

歩きだす二人、下手に退場。入れ替わりに上手から現れた神尾が下手前に退場。店の鈴が鳴る。店内、下手奥から登場する神尾。

修二　いらっしゃいませ。

神尾　あの、コーヒーを、

修二　はい、どうぞお席に。ブレンドでよろしいですか。豆でお選び頂くことも出来ますが。今月のコーヒーというのもありまして、

神尾　いえ…そうじゃなくて、先日、コーヒーを飲んで、お代を…。

修二　えっ…あ、お客様あの夜の、

神尾　ええ、お代をまだ、払ってなかったので、

修二　あ～ハイハイそれでわざわざ、どうもありがとうございます。

神尾　ありがとうって、コーヒー飲んでお代を払わずにいなくなったんですから、むしろ…申し訳ありません。

修二　いえいえ、あの状況ではしょうがないですよ。

神尾　あの、いくら払えば。

修二　もう、大丈夫です。

神尾　いえ、そういう訳には、

修二　とりあえずお掛けください。(促され席に着く神尾)うちは豆の種類で値段を変えているので。申し訳ありません、もう何を召し上がったのかも覚えていませんから。

神尾　しかし、

修二　適当に頂くという訳にも行きませんし。

神尾　すみません。

修二　あの、立ち入った事を伺ってもいいですか。

神尾　はい？

修二　どういったご関係なんですか。

神尾　え、

修二　いや、事故に遭われた方とは、お知り合いですよね。

神尾　…その事ですか。

修二　私は、あの時のご様子からてっきりご主人かと思ってたんです。でも先日、事故に遭われた方の息子さんがおいでになって、お父様じゃないって聞いたので。

神尾　…はい、違います。

修二　でも、救急車にも一緒に乗り込まれたし…お知り合いですよね。

神尾　あの…その息子さん何か言ってましたか。

修二　え、

神尾　ですから、容体とか。

修二　病院では、何もお聞きにならなかったんですか。

神尾学　あ、着いたらすぐに救急の処置が始まって、私は、急ぎの用があったので…あの、あの人の容体は…。

修二　(怪訝)…申し訳ありませんが、ご関係が分からないまま、お話しする事は。

神尾　そうですよね。

修二　その息子さんという方、とても律儀な人で、うちにおいでになったのも事故の通報をしたお礼とかって、手土産までもって、ですから、病院まで付き添われた貴方にもお礼を仰りたいんじゃないかと思いまして、それで私もつい立ち入った質問をしてしまったんです。

神尾　神尾っていいます。

修二　えっ、

神尾　私の名前です、神尾昇、嘘じゃありません、免許証、これ、(ポケットから免許証を出し)

修二　それは結構です、信じますよ。

神尾　…友達なんです。

修二　ご友人、

神尾　ええ、事故に遭った高畑さんとは、古い友達で、ずいぶん会っていませんでした。久しぶりに連絡をとって、あの夜この店で待ち合わせしていたんです。

修二　そうだったんですか。じゃあ、この店に向かってらしたんですね…。

神尾　あの、彼女は、

修二　あの後、病院には…。

神尾　彼女は、私に会うためにこの店に向かっていて事故に遭ったんです。ご家族に合わせる顔がありません。

修二　…そうですか…事故の後、ずっと意識が戻られないまま、先日亡くなられたと伺いました。

神尾　…そうですか。(俯いて、微かな嗚咽)

修二　…コーヒー、淹れますね。飲んでってください。

修二、カウンターに戻る。鈴の音が聞こえる。

修二　いらっしゃいませ。(下手奥より平山巡査が登場)あ、平山さん、

平山　こんにちはマスター、あ、今日はね、コーヒー飲みに来たんじゃないんだ。これ(脇に抱えた立て看板)表の柵のところにお願いできないかな。

修二　それは、

平山　例のひき逃げ、難航しててね。

修二　そうなんですか、

平山　だから情報提供をお願いする立て看板。

修二　平山さん、あの、

平山　商売の邪魔になるかな。

修二　いえ、それは大丈夫ですが、

平山　看板は出来るだけ事故現場に近いところに立ててるんだけどさ、あの辺りほら電柱もガードレールも無いし、それにあそこに立てると歩道がもの凄く狭くなるから。まあ、ここもそんなに離れてないし、

修二　うちは構わないんですが、

平山　助かるよ。本当今回は苦戦してるんだよ。普通はさ、割れたライトの破片とか、剥がれ落ちた塗装片とか何かしら残ってるもんなんだけど、あの雨で全部流されちゃって、手がかりが皆無。

修二　あの、平山さん、

平山　目撃者だって、いつもなら駅から団地に向けて帰宅する人の流れがあるじゃない、でもあの時電車止まってたし、

修二　そうですね、

平山　只でさえ近頃はみんな他人の事に無関心になってるからね。事故見てでもこっちが捜し出すまで名乗り出ない人が多いから。これで目撃者見つからなかったら迷宮入りかな。マスターも店のお客から何か聞いたらすぐに連絡頂戴ね。

修二　もちろんそれは、

神尾　すみません、(立ち上がり)私、これで失礼します。

修二　あの、ちょっと待ってください、(下手奥に退場する神尾)待ってください、神尾さん。

— 明転 —

オートバイのエンジン音が聞こえてくる。照明変わり、店の前の通り。上手より常雄、靖子の夫婦登場。数台のオートバイが次々と上手から下手へ通り過ぎていく音。歩道に身を寄せる二人、通り過ぎたオートバイを目で追っている。

常雄　まったく、ああいう連中を野放しにしているから日本はおかしくなる

んだ。

靖子　あなた今日はもう帰りましょう。

常雄　自由をはき違えて、他人の迷惑なんてお構い無しだ。だいたいあんな連中に、(至近距離を通過するオートバイの音、避けようとして転びそうになる靖子)

靖子　ああ、

常雄　危ない、(靖子を支える。怒り、杖を振り上げる。そこにまたオートバイが近付く音)この、馬鹿者が〜、(通過するオートバイ目掛けて振り下ろした杖が、手を離れて飛んでいく)あっ、

靖子　あなた、

常雄　しまった、

(袖中)投げた杖が走っているバイクをかすめる。ブレーキ音がしてオートバイが止まる。

常雄　手が、すべった。

靖子　どうしましょう。

オートバイが止まった方(下手袖中)を見て、動揺する二人。

啓太　(ヘルメットを外しながら下手より登場。杖を)おい、これなんだよ、これ。

常雄　わ、私の杖だよ。

啓太　んなな分かってるよ。

常雄　そうだね。でも良かった、怪我は…ない様だね。

啓太　ふざけんな、

靖子　ごめんなさいね。

啓太　じじいてめえ、どういうつもりだよ。

常雄　君たちが、暴走するから、

啓太　はあ~?てめえの方こそ暴走だろ。走ってるバイクに物を投げつけやがって、有り得ねえだろ。

常雄　投げたんじゃない、手が滑ったんだ。

啓太　言い訳してんじゃねえぞこの野郎。(常雄の襟を掴む)
靖子　(割って入りながら)何するの貴方、やめなさい、やめなさい。
啓太　こら、暴走じじい、
バイクが止まる音。
常雄　放せ、放しなさい、
靖子　やめてちょうだい、
啓太　どうしてくれるんだよ、じじい、
常雄　やめなさい、放しなさい、
啓太　この野郎、
靖子　放してちょうだい、
卓也　(下手より登場)啓ちゃん、何やってんの、
啓太　おう、卓、

卓也　おせえから、引返してきたよ。何かあった？

啓太　あったよ、このじじいとんでもない奴で、バイクで走ってる俺に杖を投げつけやがった。

卓也　はぁ？

常雄　だから故意にやったんじゃない、手が滑ったんだ。

靖子　そうなの、そうなのよ。

啓太　ふざけんな、もう少しで転んで大けが、ひょっとしたら死んでたよ。

卓也　面白えじいさんだな。

啓太　くっそ〜どうすっかな、

卓也　やっぱ金っしょ、金。

下手より修二登場。

啓太　そうだな、金出せ、十万、いや五十万だ。

常雄　何馬鹿な事を、

啓太　慰謝料だよ、死にそうな目に遭ったんだから当然だろ。
卓也　もっと貰ってもいいんじゃね。
靖子　やめてください。
常雄　放しなさい、君たちこんなことをして、
啓太　犯罪者が何偉そうに言ってるんだよ。
常雄　し、失敬な、犯罪者とは何だ、
靖子　そうよ、何を言ってるの貴方、
啓太　犯罪者じゃねえか、(杖を)これなんだよ、これ。
修二　あの、どうかしましたか。
啓太　誰だよ、お前、
修二　その店の者です。
卓也　あんた関係ないっしょ。

修二　ええ、まあ。

常雄　分かった、過失とは言え済まなかった。もう放しなさい。

啓太　謝ってんのか命令してんのかどっちだよ。

常雄　だから済まなかったって言ってるだろ。

卓也　謝んなくてもいいからさ、金、金だしな。

修二　あの、私は確かに関係ないですが、もし問題があるんなら、今そこにお巡りさんいますから相談なさってはいかがですか。

啓太　え、

卓也　啓ちゃん、サツだってどうしよう。

啓太　馬鹿、今回ばっかりは俺ら悪くねえだろ。

卓也　そうだよね。

啓太　いいか、良く聞けよ、俺がバイクで走ってたらこの爺さんがいきなり杖を投げつけてきたんだ。

修二　それはひどい。
啓太　だろ。
修二　はい、ちゃんとご自分の主張をなさった方が良いですよ。
卓也　こっちが正しいよな。
修二　そんな感じですね。
常雄　杖を振り上げたら手が滑って飛んでったんだ。
修二　つまり過失ということですね。
靖子　そうなんです。
修二　だったらちゃんと謝れば分かって貰えるんじゃないですか。話の分かる方たちみたいですよ。お金要求してくるような連中じゃないんですから。(啓太に)勿論そんな事したら恐喝になりますからね。とにかく、白黒つけるためにも今お巡りさん呼んできますから。
啓太　いや、もういいよ、うん、年寄りだし勘弁してやる。卓、いくぞ。

卓也　そ、そうだね。

修二　まあお待ちください、今お巡りさんを呼んできますから。

啓太　だから、いいって、

平山、看板をもって下手前より登場。

修二　あっ、ちょうど良かった、平山巡査。

平山　何、マスター、

啓太　卓、行くぞ。

平山　(啓太に)何かありました。

溝口啓太　別に、(卓也と二人、慌てて下手前へ退場)

平山　どうしたのマスター

修二　(夫婦の様子を見て)いや、道を聞かれて、でももう大丈夫みたいです。

バイクの発進する音。

靖子　(修二に)ありがとうございました。

常雄　お世話になりました。

修二　いえいえ、

平山　(修二に)何かあったんじゃないの、

修二　だから道を訊かれただけですよ。看板、立てるんでしょう。

平山　ああ、そうだ、そうだ。

修二　(八田夫婦に)あの、お二人、時々散歩してらっしゃるのを見かけるんですけど、ご近所ですよね。

常雄　ええ、

修二　(平山の持っている看板を)これ、

平田　あ、(見易いように看板を立てる)

修二　何かご存知だったりしませんか。

靖子　(夫と顔を見合わせた後)あいにく、何も。

修二　そうですか、いや、そうですよね、もしかしてと思って。

常雄　近頃また暴走族みたいな連中が多くなったから、きっとそういう奴らかも知れませんね。

平山　暴走族、

修二　じゃあ、平山さん。

平山　あ、うん。

看板を上手前に看板を固定する平山、八田夫婦と共に見守る修二。作業を終え、看板の前にしゃがんで手を合わせる平山、しばらくして立ち上がる。

修二　平山さん、いつもそんな風になさってるんですか。

平山　ん…うん、被害者が亡くなってる時はね。必ず、犯人捜しますからって。

修二　…そうなんですか。

靖子　見つかると良いですね。

常雄　　　そうだね。

照明変わり、夕闇が迫る。行き交う歩行者達。修二や平山に挨拶をし、下手に去っていく八田夫妻、少し遅れて上手に去って行く平山、更に遅れて下手に退場する修二。薄暗くなり、上手から神尾登場、看板をしばらく見た後、その前に座り込む。

—暗転—

翌日の午前中、リコリスの店内。店の外では、看板の傍らに神尾が座り込んでいる。

元子　　　じゃあ、マスター一応説得してみたんだ。

修二　　　うん、ずっと座ってる訳には行きませんから、とりあえず店に入って話しませんかって、言ってみた。

元子　　　それで、

修二　　　「いや、このままで」って。

元子　　　あそこにずっと座ってるってこと？

修二　　　だろうね。

元子　　　でも、何で。

修二　首から札を下げてたでしょう。目撃者に名乗り出て欲しいってことだと思うけど。

元子　「事故を見た人、名乗り出てください」って書いてあったね。でも、

修二　あの人、話を聞いてたから、

元子　えっ、

通り。上手から登場した深田早苗、下手に向かい、神尾を一瞥し下手に退場。

修二　だから、捜査がうまく行ってない、目撃者が現れなかったら迷宮入りかも知れないって平山さんの話を。

元子　そっか、それで…。古い友達って言ってたんでしょ、どんな関係なんだろね。

修二　(首を振る)…ここで待ち合わせしてたなんて、何だか申し訳無い気もしてね。

元子　マスター変な事言わないでよ。この店は全然関係ないじゃん。

修二　まあそうだけど。(鈴の音、下手奥より深田早苗登場)いらっしゃいませ。

早苗　あの、

修二　はい？

早苗　表のあの人、何とかしてくださいよ。

修二　え、

早苗　ああいう人、放っとくのはどうかと思うんです。

修二　あの、

早苗　私、地域の子供会の役員やってる深田って言います。おたくあんな人そのままにしてちゃダメですよ。ここ通学路だし、子供達いっぱい通るんですよ、何かあったらどうするんですか。

元子　あの、何でこの店に、座り込んでるのは歩道なんですから、

早苗　知ってます。歩道は通常、道路の一部、管轄は警察ですよ。署名活動にしてもティシュ配るのにしても道路使用許可を警察で貰わないと出来ないんです。私それ知ってましたから、だから今朝あの人見て何とかしなきゃって思った時も、すぐに駅前の交番に行きました。何とか

して頂戴って言いに行きましたとも。そしたらあの立て看板を設置したってお巡りさんが出てきて言うじゃありませんか「ああ、その看板の前は微妙に喫茶店の敷地なんですよって」つまりあそこ、歩道との境界がハッキリしてないけど、厳密には歩道じゃなくてこちらの駐車場の一部なんですよね。私それ知ってますから。

元子　そ、そうですか。

早苗　お宅の敷地に座り込んでるあの人をどかすのはおたくにしか出来なくて、おたくの義務なんです。

修二　あの、一度話してはみたんです、でも動いて頂けなくて、もう一度話してみます。

早苗　お願いしますよ。私、夕方また見に来ます。それまでには何とかしてくださいね。この地域の平和と安全のためですから。

二人　…。

下手奥に退場する早苗。

元子　どうする、マスター。

修二　まあ、どっちにしてもあのまま座り続けるというのは無理だし、説得するしか無いよね。

元子　そうよね、毎日暑いし雨だって降るし。

修二　…よっぽど大切な人だったんだろうね。

元子　やっぱり、昔の恋人とかかな。

修二　分からないけど…とにかく、もう一度話してみよう。

元子　うん。

下手奥に退場する二人。照明変わり表に座っている神尾。下手前より修二と元子登場。神尾の元に歩み寄る。

修二　神尾さん、中で話しませんか。

神尾　…。

元子　あの、

神尾　…。

修二　さっきも言いましたが、ここにずっと座ってるって訳にはいかないじゃないですか。

神尾　…。

元子　私たち別に、文句言ってるんじゃなくて、

立ち上がる神尾、

元子　あの、

上手に向かって歩き始める。

修二　神尾さん、

神尾、上手より退場。見送る二人、やがて互いの顔を見て驚きの表情。二人、下手前に退場。上手、下手より人の往来。早苗下手奥より登場し、神尾が立ち去った事を確認し、下手に立ち去る。また上手下手へと数人の人の往来。神尾、上手より登場し、再び座りこむ。照明が変わり、修二一人だけの店内。テーブルを拭いている修二。鈴が鳴り、元子下手より登場。

元子　マスター、

修二　どうしたの、元ちゃん、

元子　あの人、神尾さん、また座ってる。

修二　え、

元子　また戻って来てるのよ。

鈴が鳴り、下手より早苗登場。

修二　いらっしゃいませ。

早苗　おたくね、人を馬鹿にしてるの。

修二　あの、

早苗　やっぱり座ってるじゃないのあの人。

修二　そうみたいですね、

早苗　そうみたいって、おたく言ったじゃないですか必ず何とかするって。

元子　あの、私たちもちゃんと話したんです。

早苗　そう、ちゃんと話したの、私が夕方また見に来るって言ったから、その時間だけどこかに行くようにって、ちゃんと話したのね。

元子　はあ？

店の前の通り、平山上手より登場。神尾に気付き、その前にしゃがみこみ、何か話しているシルエット。やがて下手に立ち去る。

早苗　貴方がた、ちっとも分かってないじゃない。

元子　あの、奥さん、

早苗　深田です。

元子　あ、はい、

修二　すみません、あの深田さん、とりあえずお話しませんか。

早苗　私話してますけど。

修二　ですから、その、(テーブルに促し)お掛け頂いて。私たちも何とかしなくちゃいけないとは思ってます。だから、その、対策を練るというか。

渋々席に着く早苗。元子も同じテーブルの席に座る。カウンターに回る修二。

修二　アイスコーヒーでよろしいですか。

早苗　お茶なんてどうでもいいです。

修二　そうですね、でもまあ、とりあえず。（お茶の用意を続ける）

早苗　貴方がた全然わかってらっしゃらないようですけど、浮浪者でもホームレスでもああいう人たちって最初が肝心なんです。

元子　あの深田さん、ホームレスって、それちょっと違うんじゃないですか、

早苗　どこが違うんですか。

元子　あの神尾さんは、

早苗　神尾さんていうの、あの人、

元子　あ、はい、

早苗　知り合いなの、

元子　え、いえ、

鈴が鳴り、下手より平山登場。早苗に気付かず話し始める。

平山　マスター、まずいよ〜。

修二　平山さん、

平山　午前中にさ、近所のうるさいおばちゃんが交番に来てね、

修二　平山さん、あの、

平山　そこの看板の前に浮浪者が座り込んでるから、どかしてくれって言って来たのよ。朝の忙しい時間だよ、

修二　平山さん、ちょ、ちょっと待ってください。

平山　そう、ちょっと待ってくれりゃあいいのに、もの凄い剣幕でまくしたてて、鬼の形相、いやもうナマハゲみたいな顔して怒鳴りこんできてさ、面倒くさいから適当にあしらったんだけど、おばちゃんここに来なかった。

修二　おいでになってます。

平山　あ、やっぱり。ごめんね、俺看板の前はこの店の敷地だって言っちゃ

ったのよ。まあこの炎天下、その浮浪者もそんなに長くは座ってられないだろうって軽く考えてさ、でも今本人と話したら、動くつもりがまったく無いみたいなんだよ。これ面倒なことになったよ。

早苗　そうですね、面倒ですよね。

平山　そう、めちゃくちゃ面倒で、(早苗に気付き固まる)

元子　平山さん、

早苗　そうですか、警察もそういう認識なんですか、分かりました。よっく分かりました。

平山　あの、

修二　深田さん、あの、

早苗　私、戦いますから、徹底的に戦いますから。

元子　戦うってそんな、

早苗　(平山に)あなた、お名前は、

平山　な、名乗る程の者でも、

早苗　名前、

平山　平山です。

早苗　そうですか。平山さん、交番勤務の警察官は地方公務員ですよね、私それ知ってますから。

平山　は？

早苗　そしてちなみに、いいですか、ちなみに私の主人の兄は県会議員をやってます。三期連続当選して県議会の公安および防災に関する委員会の議長を務めています。

平山　へ、

早苗　意味、お分かりですよね。

平山　あの、

早苗　県議会の公安に関する委員会の議長ということは、警察の人事権をもっているようなもの、つまり警官の職務怠慢や不祥事を糾弾し、場合

によっては勧告、訓戒、処罰を求める立場にあるということです、私の主人の兄が。

平山　あの、

早苗　うるさいおばちゃんですから、適当にあしらわれましたし、鬼だナマハゲだって中傷も受けましたけど、私、徹底的に戦いますから。

早苗、下手に退場する。

修二　平山さん、

平山　…終わった、俺の人生が終わった。

元子　そんな、大げさなこと、

修二　平山さん、

平山　…マスター、元ちゃん、サヨナラ。(腰の拳銃に手を)

修二　(平山を抑えながら)何やってるんですか～、

元子　平山さん～、

平山　嘘嘘、冗談です、

元子　いい加減にしてよ。

修二　本当怒りますよ。

平山　ごめん、ごめん、

元子　まったく。

平山　でも本当死にたいくらいの気持ちだよ。県会議員だって、どうしよう、俺、懲戒免職かな。

修二　大丈夫ですよ。あの奥さんが過剰反応しているだけですよ。

平山　そう？

修二　そうですよ。だって問題と言っても個人の敷地に人が座ってるだけですよ。

元子　そうよ、本来何も文句言われる筋合いじゃないのよ。

平山　そうだよね、そうだよね。

元子　鬼やナマハゲは余計だったと思うけど。
平山　だって眼が血走ってたんだもん。
元子　分かるけど。
修二　むしろ気になるのは、神尾さんの方ですよ。
元子　そうね。
平山　座り込んでるおじさんのこと?あの人、被害者の知り合いか何か?
元子　平山さん、警察官なんだよね。
平山　まあ、一応は、
鈴の音、下手奥より篤志、登場。
篤志　こんにちは。
修二　いらっしゃい。
平山　よっ、篤志君、

篤志　こんちは平山さん。マスター、表のあの人、あの夜のおじさんだよね。

修二　うん、そうなんだよ、

元子　朝からずっとあんな感じなの。

篤志　俺、夕方さ、あの人マルチョウで見たよ。

修二　マルチョウで。

篤志　うん、トイレから出て来たあの人とぶつかりそうになって、あれ、見たことある人だなって思ったんだよ。その時は思い出せなかったけど。

元子　夕方、てことはマスター、さっきのは、

修二　スーパーのトイレに行ってたんだ。

元子　何なのよ。

修二　何となく、長くなるのも覚悟しているって感じだね。

元子　え、

修二　きっとそうだよ。